

千葉県環境審議会鳥獣部会アライグマ小委員会の開催結果（概要）

1 開催日時 令和6年3月15日（金）

午後1時から午後2時40分

2 開催場所 千葉県森林会館 5階 第1会議室

千葉市中央区長洲 1-15-7

3 出席者

【委員】浅野玄委員（委員長）、加藤卓也委員、役山多佳志委員、榎本文夫委員、手塚幸夫委員、宮城武委員、西村壽委員、渡辺徳之委員、岡本和博委員

【県】市原岳人自然保護課副課長、他自然保護課職員

4 議 題

第1号 第2次千葉県アライグマ防除実施計画の中間評価について

5 結果

第1号議題について議論がなされ、事務局が原案を修正したのち、再度、委員の了承を得ることとなった。

6 主な質疑・意見

（1）資料1の説明について

問 図1について、捕獲数がない市町村は、捕獲を実施しているが捕獲されていないということか。（加藤委員）

答 そう考えられる。（事務局）

問 成獣と幼獣の判断基準は何か。（加藤委員）

答 体重で判断している。（事務局）

問 くくりわなの構造はどのようなものか。（加藤委員）

答 くくりわなは、アライグマ専用ではなくイノシシなど他獣種の錯誤捕獲がある。ただし、一部の市町村ではエッグトラップ型のわなも使用している。（事務局）

問 捕獲効率を算出するのにくくりわなのデータは含まれるのか。(加藤委員)

答 県が貸し出しをしている箱わなのデータのみに基づいて計算している。(事務局)

問 別紙Ⅰについて、自動撮影カメラの REST モデルは閉鎖集団を想定している。今回のように通年設置だと、出生から分散の移動が起きるので、その点は考慮しているのか。また、利用環境の選択の解析は RAI を使用しているが、REST モデルに環境変数を共変量として使う手法もある。RAI を使用した理由は何か。(加藤委員)

答 令和4年度は予備調査で令和5年度の捕獲地点の抽出のため、簡易な解析を行った。詳細な解析は令和6年度に捕獲結果と併せて行う予定である。そのため、対象地域外への移動は考慮できていない。(事務局)

問 RAI を使用したのは利用頻度を解明するためか。(加藤委員)

答 そのとおりである。(事務局)

意 図Ⅰの捕獲数の示し方は、頭数の刻み方が大きいので、捕獲数の推移が見えにくいので凡例を検討してほしい。(手塚委員)

問 生活被害の動植物のカテゴリについて、サンショウウオはどのカテゴリに含まれるのか。また、ハクビシンへの被害はあるのか。(手塚委員)

答 サンショウウオは水生生物に含めている。また、ハクビシンへの被害の情報は寄せられていない。(事務局)

問 捕獲数1万頭のうち、県の施設に持ち込まれた個体は 1,000 頭程度と思われるが、残りの個体の殺処分方法はどのようなものか。(手塚委員)

答 電気槍が多く、一部、炭酸ガスによる処分をしている市町村もある。(事務局)

問 捕獲数には民間業者による捕獲も含まれているのか。(役山委員)

答 含まれている。(事務局)

問 前回の小委員会の時に、市町村が県の殺処分施設まで持ち込むのが負担との話の中で、犬や猫等のための既設の殺処分場の活用について意見が出たが、どうなったか。(役山委員)

答 新しい施設の設置ではなく、補助金で、炭酸ガスによる小型殺処分器の市町村への導入を助成している。(事務局)

(2) 資料2の説明について

問 くくりわなと箱わなのうち捕獲効率が高いのはどちらか。(役山委員)

答 捕獲効率は大きな差がないが、捕獲後の対処がしやすいので箱わなを推奨している。錯誤捕獲については、アライグマ専用のわなでも猫などが捕獲される場合があるが、くくりわなに比べ安全に放獣できる。(加藤委員)

意 箱わなに馴れる個体が出てくる。(役山委員)

意 一般的な箱わなを警戒し、かからない個体が出たときは、箱わなに加えて機序の異なるタイプのわなを併用するとよい。(加藤委員)

意 生息密度が高まるとくくりわなでの錯誤捕獲が増える印象がある。アライグマが錯誤捕獲されると、くくりわなが壊れて使えなくなるため、狩猟者が嫌がっている。くくりわなの錯誤捕獲に関する情報を集める時期に来ている。(濱中委員)

意 アライグマ専用の新しい箱わなは価格が高いというデメリットもある。わなのサイズを大きくしただけでも捕獲できるようになったという事例もある。(加藤委員)

意 捕獲従事者は狩猟者ではなく、市町村職員や一般農家が中心。捕獲数を考えると、箱わなで十分とは思いますが、一種類の箱わなではなく様々なタイプの箱わなを試してみてもどうか。くくりわなは、毎日の見回りが大変であることに加え、錯誤捕獲があるとわな設置者の責任も問われることを考えると、捕獲者は手間のかからない箱わなを選ぶと思う。くくりわなでも、箱わなと同じように扱えるものが開発できれば使い勝手は良いかと思う。県には新しいわなの開発を進めてほしい。(榎本委員)

意 希少種の保護について、安房地区を前線ととらえ、イシガメ被害を追記してほしい。また、捕獲数について、夷隅地域では、捕獲圧は上がっているが、1,500~2,000頭を捕獲しても個体数が減っていないのは異常である。他の地域も捕獲数が夷隅地域に追随している点を危惧すべきである。捕獲方法の開発、処分の問題にも取り組むべきである。(手塚委員)

問 人材育成について、モデル地区での防除は事業者が実施しているのか。それとも住民を巻き込んでいるのか。(加藤委員)

答 今年度の捕獲は事業者に委託している。捕獲を実施していることは、住民に周知しているが、協力は求めている。(事務局)

意 アライグマの取り組みがうまくいっているのは、地域住民が一丸となって取り組んでいる地域。技術普及だけでなく、地域としてやる気を起こさせることが重要なので、今後、検討してほしい。(加藤委員)

問 農業被害対策で地域研修を行っているが、捕獲の話はあるのか。(浅野委員)

- 答 地域によっては専門家を招聘して捕獲を実施している地域もある。(事務局)
- 意 優良事例は広めるべきなので検討していただきたい。(浅野委員)
- 意 市町村職員への研修を実施してきたが、その次に市町村が企画する研修会のサポートが必要である。いすみ市の捕獲数は全国トップレベルだと思うが、いすみ市は研修会をこまめに実施しており、猟友会の会長を含め、参加してもらったのでその場での議論が役立っているのではないかと。アライグマに対しては、可哀そうという意見が出ることも多いので、感染症の知識を啓発することも大事である。地域ごとに、野生動物の病気を熟知している獣医もいるので、勉強会を開催してもらうことで、地域のモチベーションも高まるのではないかと。(手塚委員)
- 意 (柏市では)アライグマが増えるにつれ、タヌキが減った気がする。(役山委員)
- 意 (いすみ市では)ハクビシンが市街地で住みづらくなったという声もある。(手塚委員)
- 意 防除の啓発に関する提案として、埼玉県では高校生物部、生物教員の集まりでアライグマの調査会やシンポジウムを実施している。学校に働きかけるのも良いと思う。(加藤委員)
- 問 有害捕獲については、シルバー人材センターに委託しており、会員は狩猟免許を持っている。有害捕獲では、アライグマ以外にタヌキなどが捕獲され、一頭あたり3万円近い費用が掛かっている。アライグマだけ捕獲できるような良い方法があれば教えていただきたい。(岡本委員)
- 答 アライグマ専用のエッグトラップや専用の箱わなもあるが、錯誤捕獲を0にする方法はない。地域に応じて、わなを使い分けることが重要かと思う。(浅野委員)
- 意 アライグマ、ハクビシンは爪痕等の痕跡から見分けられるので、場所を見極めることである程度、錯誤捕獲を減らせるのではないかと。(手塚委員)
- 意 外来種としてのアライグマを減らす事業と、獣害対策としての事業は、本来、目的が別であるはずなのに、アライグマの捕獲が有害鳥獣対策の一環になってしまっている。実現は難しいが、有害鳥獣対策の事業は続けながら、アライグマの事業を別に組んで予算を当てるべき。被害の有無にかかわらずアライグマの生息環境に特化した捕獲は、本来必要なはずだが、割合として少ないのが実情である。(加藤委員)
- 意 市町村とも連絡を取りながら、第3期を見据えて、残り2年をどう活動するかを検討してほしい。個人的には、千葉県からアライグマを排除することはほぼ不可能と

考えている。農業被害と生態系被害は切り分けるべきで、生態系被害の情報をもっと収集すべきである。また、出来る場所からピンポイントで排除し、その後、どうやって侵入を防ぐかを考えるべきである。アライグマを将来的にどうすべきかをローカルの視点で考えることが第3期で必要かと思う。(浅野委員)